

行いが伴わないなら

ヤコブの手紙 2章 14-19節

はじめに

今日は、イエス様への「信仰」と「隣人への愛」の関係について学びたいと思います。

1. 行いのない信仰は、その人を救うことができない

14節には、「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか」とあります。ここには、行いのない信仰は何の役にも立たないと言われていています。特に、その人の救いに関して何の役にも立たないと言われていています。つまり、行いを伴わない信仰は、その人を救うことができないと言うのです。

では、ここでの「行い」とは何を意味するのでしょうか。ここでの「行い」とは、8節にあるように「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という律法を守ることだと思います。

「ヤコブの手紙」は、主の兄弟ヤコブが、ユダヤ人クリスチャンに宛てて書いた手紙だと言われていますが、この手紙の2章からユダヤ人クリスチャンたちの間に起きていた「**えこひいき**」の問題が取り上げられています。「えこひいき」とは、人を表面的・外面的に判断して差別することですが、彼らは教会内で、経済的に豊かな人たちを重んじ、貧しい人たちを軽んじていたのです。経済的に豊かな人たちには良い席を座らせ、貧しい人たちは立たせたままにしたり、地べたに座らせたりしていたようです。

そこでヤコブは、「えこひいき」は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という律法に違反する「罪」であると指摘するのです。

ヤコブが「行いのない信仰」と言っているのは、文脈の流れから見ると、「隣人への愛」を伴わない信仰であり、「えこひいき」をするような信仰のことだと言えます。

ヤコブは、「隣人への愛」を伴わない信仰、「えこひいき」をするような信仰は、その人の救いに何の役にも立たないと言っているのだと思います。

2. 行いのない信仰は、死んでいる

17節には、「**信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです**」とあります。今度は、「行いのない信仰」は「死んでいる」とあります。

15-16節には、それを説明するための例話が書かれています。そこには、教会の兄弟姉妹が着る物がなくて裸でいる時、またその日に食べる物がなくて困っている時、「**安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい**」と言うだけで、実際に着る物や食べ物を

与えないなら、何の役にも立たないとあります。実際に着る物を与えなければ、その人は寒さで凍え死ぬかもしれませんし、食べ物を与えなければ、その人は空腹で飢え死にするかもしれません。

同じように、私たちの信仰も、行いが伴わなかったら死んでしまうと言うのです。この例話は、暗にユダヤ人クリスチャンたちを批判しているのだと思います。当時の貧しい人たちとは、おもに「孤児」や「やもめたち」であったようです。彼らは親もなく、夫もなく、生活に困窮していたのです。ユダヤ人クリスチャンたちの中には、たとえ「孤児」や「やもめたち」に着る物や食べ物がなくても、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい」と祝福の祈りをしたり、優しい言葉をかけるだけで、実際に必要な着る物や食べ物を与えなかった人たちがいたのでしょうか。

ヤコブはここで、言葉だけ、祈るだけの信仰を暗に批判しているのだと思います。言葉だけ、祈るだけの信仰は、「行いのない信仰」であり、「死んでいる信仰」だと暗に批判しているのです。

聖書では、死は「分離」を意味します。神様と人間の関係が分離されることを「霊的な死」と呼び、体と魂が分離することを「肉体の死」と呼びます。同じように「信仰」も、「行い」と分離し、切り離されてしまうと死んでしまうのです。信仰は、行いを伴ってこそ、初めて生きたものとなるのです。その行いとは、「隣人への愛」です。隣人への愛が伴う信仰こそ、いのちのある生きた信仰と言えるのではないのでしょうか。

ガラテヤ5：6でパウロは、「**キリスト・イエスにあって大事なのは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです**」と語っています。ここでの「愛によって働く信仰」とは、新共同訳聖書では「愛の実践を伴う信仰」と訳されています。

「ウェストミンスター信仰告白」においても、私たちが義と認める信仰とは、「**決して死んだ信仰ではなく、愛によって働くものである**」(11:2)と語られています。私たちの救いに役に立つ信仰、いのちのある生きた信仰とは、行いを伴う信仰であり、「隣人への愛」が伴う信仰であると言えるのではないのでしょうか。

3. 信仰は行いによって見せるもの

18節には、「**しかし『ある人には信仰があるが、ほかの人には行いがあります』と言う人がいるでしょう。行いのないあなたの信仰を私に見せてください。私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます**」とあります。ユダヤ人クリスチャンの中には、信仰や行いは「賜物」であって、必ずしも信仰に行いが伴わなくても良い、また逆に行いに信仰が伴わなくても良いと考える人がいたようです。しかしヤコブは、信仰と行いは決して切り離されてはならない、信仰は行いによって示されるものだと言います。

信仰に行いが伴わない生き方、それは隣人への愛を伴わない信仰です。それは律法主義や知識だけの信仰に陥る危険性があります。逆に行いに信仰が伴わない生き方、それは信仰を伴わない隣人への愛です。それは単なる世俗の福祉活動となってしまいます。

私たちは、行いのない信仰にも、信仰のない行いにも陥らないように、気を付けなければなりません。それはつまり、隣人への愛のない信仰にも、信仰のない隣人への愛にも陥らないように、気を付けなければならないということです。私たちが歩むべき道は、そのいずれとも違う道です。私たちが歩むべき道は、「行いを伴う信仰」の道、「隣人への愛を伴う信仰」の道です。また「信仰を伴う行い」の道、「信仰を伴う隣人への愛」の道です。

ヤコブは、「私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます」と言っています。信仰は、目に見える形に示すものであるとヤコブは言うのです。目に見えない信仰は、目に見える形で人々に証ししなければなりません。その信仰の目に見える形の 하나가、「隣人への愛」なのです。

2:1には「**私たちの主、栄光のイエス・キリストへの信仰を持っていながら、人をえこひいきすることがあってはなりません**」とあります。イエス様を信じる者には、「えこひいき」があつてはならないのです。なぜならイエス様は、「えこひいき」をなさらなかったからです。イエス様こそ、「隣人への愛」を実践された方です。病気や障がいを持つ人たち、貧しい人たち、社会的に疎外されている人たちに目を注ぎ、彼らに仕えられました。そして私たちのための贖いの代価として、御自身の命を献げられて、私たちにも仕えてくださいました。そうして罪の奴隷であった私たちを愛し、私たちの「隣人」となってくださいました。そのイエス様を信じ、そのイエス様と御霊によって一つに結ばれた私たちが、「隣人への愛」を持たないはずがないのです。イエス様への真実な信仰は、必ず私たちの内に「隣人への愛」を生み出すのです。その信仰を、私たちは目に見える形で人々に示し、証していかなければならないのです。

4. 悪霊も信仰を持っている

19 節には「**あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことです。ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています**」とあります。ここには、悪霊たちも正しい神学的知識と信仰を持っているとあります。しかし悪霊たちの信仰はもちろん、救いに至る信仰ではありません。彼らの信仰は、正しい神学的知識はありますが、決してイエス様に寄り頼みはしないからです。そのため悪霊たちには、隣人への愛は生まれません。その代わりに恐怖に包まれ、身震いするのです。ここでは、神学的な知識だけの信仰を、行いのない信仰だと暗に批判しているのだと思います。

ヤコブは、信仰は決して行いと切り離されてはならないと言います。行いから切り離された信仰は、死んだものであり、救いに関して役に立たないと言います。イエス様への信仰は、「隣人への愛」となって表れてきます。1:27には、「**父である神の御前できよく汚れのない宗教とは、孤児ややもめたちが困っているときに世話をし、この世の汚れにそまらないよう自分を守ることです**」とあります。キリスト教の信仰は、生活に困難を覚える人を心に留め、具体的な支援をするという形に表われてくるものです。決して言葉だけ、祈るだけ、神学的な知識だけのものではありません。

5. 日本長老教会と行ないを伴う信仰

私たち日本長老教会の憲法の「執事職」について書かれている「総則」の第41条には、こうあります。「**罪からの救いの福音は、隣人と社会への愛と奉仕をもたらすものであるため、教会は執事職を通じて教会の外にも働きかける**」。私たち日本長老教会は、福音への信仰は、私たちの内に「隣人と社会への愛と奉仕をもたらす」という確信に立っています。それゆえ、イエス様の愛とあわれみの模範にならって慈善の奉仕をする「執事」という職務を制度的に定めています。

私たち日本長老教会は、イエス様を信じる福音への信仰は「隣人への愛」を生み出すという確信に立っているのです。そして私たちの信仰が、言葉だけ、祈るだけ、神学的な知識だけではなく、「いのちのある生きた信仰」であるということを証しするために、「執事職」を制度的に定めているのではないのでしょうか。私たち日本長老教会は、私たちの信仰が生きた真の信仰であることを、「執事職」を持つことを通して、制度的に証しているのではないのでしょうか。

私たち日本長老教会は、牧師職を通して福音を証していきます。そして福音を通して得た実は、必ず「隣人への愛」を生み出すという確信があるため、執事職を定めているのだと思います。その意味で、牧師が大胆に福音を語り、執事たちを通して活発に「隣人への愛」が実践されている、そのような教会こそ、いのちのある生きた信仰を持つ教会と言えるのではないのでしょうか。

おわりに

イエス様を信じる私たちは、言葉だけ、祈るだけ、神学的な知識だけではなく、具体的に仕えることを通して人々の「隣人」となり、その愛を示していかなければなりません。

そのことを通して私たちは、自分たちの信仰がいのちのある生きた信仰であることを、教会の内外に証していくことができるのではないのでしょうか。

天におられる愛と憐みに富んでおられる主なる神様。

あなたはイエス様を通して私たちに愛を示し、イエス様は私たちの「隣人」となってくれました。そのイエス様を信じる私たちは、「隣人への愛」を通して、その信仰を証していくことが求められています。どうか私たちが、言葉だけ、祈るだけ、神学的な知識だけでなく、具体的に隣人に仕えることを通して、その信仰がいのちある生きたものであることを証しさせてください。

この祈りを私たちの贖い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。